

ところで、岡田さんの小説にはこれといって変わった人物は描かれていない。市井で我々の隣にいるような人々、そんな人物を等身大に描いているのだが、時にそれは凄みを持ってせまってくる。これは冷徹とも見える文章、巧みな描写の力によるものだろう。

それ故に岡田さんは常に透徹した視点で時代の移ろいを見すえ、鋭い人間観察を怠らなかつた、とそう思う。今も作品の中に岡田さんは生きて在るかのようだ。

今年平成二十年（二〇〇八）一月十二日、作家岡田みゆきさんは静かにこの世を去った。

九十歳であった。

合掌。

## うた 短歌が生まれるとき

松田 一美

短歌を創りはじめて三十五年になる。継続は力なりというが、短歌雑誌や新聞などに発表した歌は千首を超えた。歌が生まれる過程を二首ではあるが、ここに紹介してみたい。

●美術館騒げり ゴッホのひまはりが枯れる寸前くしゅみしたとか

ゴッホは花瓶に挿した向日葵の油彩画を七点遺している。が、うち一点は焼失して存在しない。ゴッホの展覧会（架空でもよい）を観に行く。「十五本の向日葵」や「十二本の向日葵」など有名な絵が並ぶ。その位置より少し離れた壁に、焼失したはずの「五本の向日葵」は飾られていた。絵の中の枯れる寸前の向日葵がくしゃみをした、と言って観覧者の一人が叫んだ。騒ぎは館内に反響する。

●秋西蜻蛉むれてなかざらべにしぐれ あの子がほしい この子がほしい

六月上旬ごろに羽化したアキアカネは高原に移動、そこで盛夏を過ごす。秋には体を紅色に変え、大群を成して低地に戻ってくる。

勝って嬉しい花一匁、負けて悔しい花一匁、あの子がほしい、あの子じゃ分らん、この子がほしい、この子じゃ分らん。現実には目を飛び交う蜻蛉と、遠い昔に遊んだ記憶が心象となってコラボレーションする。